

乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程

— 第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に —

上 田 七 生

(2002年9月30日受理)

The process of developing and changing of infant-teacher attachment:
A study on an infant whose attachment to the first attachment figure is insecure

Nao Ueda

Toward infants whose attachment to their first attachment figures (mainly their mothers) is insecure, how can we intervene in them? To reveal it, an observation was carried out regularly once a week, over a period of 9 months. The subjects were an infant who has insecure attachment and comparative one who has secure attachment. And the attachment behaviors they exhibited toward nursery school teachers, strangers, and an observer were counted. The amount of the attachment behaviors of the infant whose attachment was insecure had been large for 9 months. In conclusion, the infant became to be attached to a nursery school teacher for his first attachment figure, and the infant-teacher attachment began to be secure.

Key words: the first attachment figure, nursery school teacher, attachment behavior, longitudinal study

キーワード：第一愛着対象者，保育者，愛着行動，縦断研究

乳児は、生後まもない時期からもっとも多く相互作用を交わす人物（第一愛着対象者）との間に、愛着関係を形成させていく。その人物とは多くの場合、出産まもない時期より母乳を与えるなど乳児とのかかわりが多い母親である。乳児は、誕生から60日前後で、母親（またはそれに代わる人物；以下母親とする）を「社会的関係を担う人、つまり相手をしてくれる人」（Bower, 1979）として認識するようになり、母親は乳児にとって特別な存在となっていく。特別な存在となった母親が、泣き叫び(crying)、微笑(smiling)、喃語(babbling)といった乳児の信号を状況に応じて適切に受けとめ、相互作用を繰り返すことによって、徐々に母子間の愛着関係は安定していく。

第一愛着対象者との愛着関係は、その後の愛着形成に大きく影響する。第一愛着対象者との愛着関係が絶対的なものとして存続し、その後の多くの関係の基盤になるとの主張（Bowlby, 1980; Main, 1991; Sroufe, Egeland, & Kreutzer, 1990 など）もある。しかし、

Leiderman (1989) は、後に愛着障害や社会的不適応が生じるのは早期に経験するほとんどの関係が不安定な場合であり、たとえ第一愛着対象者との関係が崩壊していたとしても、その他の愛着対象者との間に少なくとも1つ安定した愛着関係が存在すれば、その後の愛着関係や対人関係様式は十分安定したものに発達し得ると主張している。また、愛着関係に関する内的なモデルが幼児期から成人期に至る発達過程の中で大きく変化する可能性も示されている（遠藤, 1992）。すなわち、Leiderman (1989) や遠藤 (1992) から、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児（ここでは、乳児は3歳未満の子ども、幼児は3歳以上の子どもと定義する）にとって、その後に安定した対人関係が望めないということは必ずしもないといえよう。保育所や幼稚園の保育者は、第一愛着対象者の代理としての愛着対象者となり得るし、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児が、こういった代理としての愛着対象者との間に愛着関係を形成させて安定するこ

とができれば、その愛着対象者との愛着関係を基盤として、その後も安定した対人関係を築いていくことができると考えられる。

また、乳幼児と保育者との愛着関係が安定することにより、乳幼児と第一愛着対象者との関係が改善される可能性も示されている(鯨岡, 1986; 吉葉, 2001; 阿部, 2001)。金子(1996)、立元・千坂(1998)は、乳児院における事例をあげ、乳幼児の養育環境を改善することによって、第一愛着対象者に関するモデルを修正し、その後の発達を支えていく可能性を指摘している。

以上のことから、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児にとって、保育者は、第一愛着対象者の代理としての愛着対象者となり得るのみではなく、乳幼児と第一愛着対象者との関係を改善させる仲立ちともなり得る重要な人物であると考えられる。それでは、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児に対して、保育者はどのようにかかわるのが望ましいのであろうか。また、第一愛着対象者との関係改善の糸口は何であらうか。これらのことを明らかにするためには、愛着関係の形成過程および変容過程に注目する必要がある。しかし、乳幼児における愛着関係の形成過程および変容過程に関しては、これまでほとんど明らかにされていない。

そこで本研究では、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児が保育者との間に愛着関係を形成させていく過程、および第一愛着対象者との関係改善の可能性について、第一愛着対象者との愛着関係が安定している対象児と比較しながら検討する。具体的には、不安定な乳児および安定している乳児について、それぞれ1名ずつを観察の対象として比較検討する。第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児にとって、保育者が第一愛着対象者の代理としての愛着対象者となれば、対象児は、特定の保育者との間に愛着関係を形成させ、徐々にその愛着関係が安定していくと予測される。その過程で多くの愛着行動が示されるであろう。また、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児は、見知らぬ人物に対する愛着行動を多く示す傾向がある(鯨岡, 1988; 金子, 1993)ため、特定の保育者との間に愛着関係が形成されるまでの間は、見知らぬ人物や観察者との身体接触が多くなると予測される。次に、保育者と対象児との愛着関係が安定すれば、般化が生じて対象児と第一愛着対象者との関係が改善されると予測される。

方 法

I. 対象児の抽出

広島県内のE保育所において、1歳児クラスの乳児

の母親(10名)に質問紙調査(AQS:母子間の愛着測定尺度)を実施し、その結果を参考に保育者と話し合い、対象児を決定した。

II. 縦断的観察による愛着形成・変容過程の追跡

対象者:(1) 第一愛着対象者との愛着関係が不安定なしげと(1歳3ヶ月)、比較する対象として、第一愛着対象者との愛着関係が安定したとおる(1歳6ヶ月)(対象児の名前はすべて仮名である)。(2) 担任保育者7名。1年度目は、おくむら先生およびその他の先生2名。2年度目は、おくむら先生およびその他の先生4名(保育者の名前はすべて仮名である)。

観察期間・観察時間:観察期間は、2001年2月~2001年10月。観察時間は、午前9時半~11時までの1時間半。

観察内容:1週間に1度、乳児室において対象児と保育者とのやり取りを観察した。毎月1度、初対面の人物を乳児室に連れて行き、対象児の行動を観察した。同様に、週に1度だけ顔を合わせる観察者に対する対象児の行動も観察した。

記録方法・分析方法:乳児室における対象児の行動および大人(保育者、見知らぬ人物、観察者)に対する愛着行動をビデオカメラで録画した。愛着行動に関しては、事前の観察結果とAQSを参考にしてチェックリストを作成し、KJ法によりチェック項目を以下の4カテゴリーに分類した。

【愛情欲求カテゴリー】

1. 保育者の前で、ぐずぐず言う。
2. 保育者の背によじ登ったり、ひざに座ったりといった身体接触を持つ。
3. 保育者の注意をひこうとする。
4. 保育者の行動を見て、保育者の行動や物のやり取りをまねる。
5. 保育者と一緒に遊ぶ。

【安全基地カテゴリー】

1. 機嫌が悪かったが、保育者が抱いて、すぐに泣くのをやめ落ち着く。
2. 保育者の居所に注意を払い、保育者の近くに留まったり、戻ってくる。
3. したいことがあるとき、保育者を頼りにする。
4. 初めての訪問者が来ると、保育者のもとへかけていたり、保育者の陰から覗く。

【人なつきカテゴリー(見知らぬ人物への行動)】

1. 機嫌が悪かったが、保育者以外の人がなだめて受け入れる。
2. 初めての訪問者に近寄る。
3. 初めての訪問者におもちゃを見せたり、自分のできることをやって見せたりする。

4. 初めての訪問者と一緒に遊ぶ。
5. 初めての訪問者に抱っこや肩車などをしてもらう。
 【従順カテゴリー】
1. 友達とおもちゃなどの取り合いになり、諦めて譲る。
2. おもちゃを大切に扱う。
3. 保育者がすることを嫌がらずに待つ(服の着替え、鼻かみなど)。
4. 保育者に言われたことをしようとする。
5. してはいけないことを注意され、やめる。

上記のカテゴリーに含まれない行動については、「その他」の行動として分類した。タイムサンプリング法を用いて、1分ごとに、観察された行動についてコーディングした。観察時間は1日につき約1時間半であったが、日によってその時間が異なったり、対象児が撮影不可能な範囲にいることもあった。そこで、単位を統一するために、対象児ごとにコーディングされた行動について、出現率(カテゴリーごとの行動の頻度/その日の観察時間)を求めた。出現率の9ヶ月間の推移によって愛着関係がどのように変容したかを検討した。なお、愛着行動には、「従順」カテゴリーの行動は含まなかった。従順カテゴリーに属する行動は、愛着関係の安定・不安定にかかわらず、どの子どもにも多くみられると判断したためである。さらに、観察場面以外での子どもの様子や母親との関係について、保育者に記録してもらい、毎月1回、保育者と話し合いをした。すべての観察終了後(2001年10月)、保育者と話し合い、対象児と母親との関係等について考察のための情報を得た。

結果と考察

第一愛着対象者との愛着関係が不安定なしげとの、行動全体に占める愛着行動(「愛情欲求」行動および「安全基地」行動)の割合は、第一愛着対象者との愛着関係が安定しているとおると比較すると、9ヶ月を通してやや高めであった(図1-1、図1-2)。愛着行動のうち、保育者に対する「愛情欲求」行動(図2-1、図2-2)に関して、とおると比較するとし

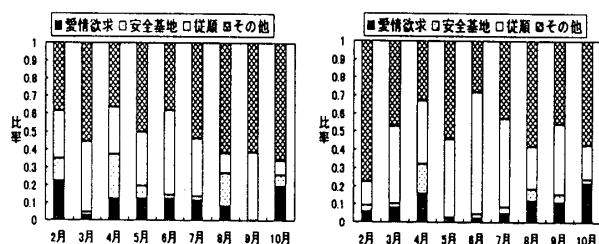


図1-1. しげと 行動全体 図1-2. とおる 行動全体

げとには行動が多くみられた。不安定なしげとの、保育者に対する「愛情欲求」行動が、安定しているとおるよりも9ヶ月を通して多かったことは、しげとが9ヶ月を通して「欲求を受けとめてほしい」という気持ちが強かったことの現れであろう。また、「安全基地」行動(図3-1、図3-2)に関して、とおるとしげとの間には顕著な差がみられた。図2-1および図3-1に示すように、しげとの愛着行動の大半はおくむら先生に向けられており、ここからしげとの保育所における愛着対象者はおくむら先生であったといえよう。特に、4月にクラス的环境が変わった際に、おくむら先生に対する「安全基地」行動が多くなっており、不安なときにおくむら先生を安全基地としていたことがわかる。この時期のおくむら先生の記録ノート(以下参照)からも、しげとがおくむら先生を安全基地としていた様子がうかがえる(波線部)。ここから、第一愛着対象者との愛着関係が不安定なしげとの、保育所における愛着対象者、すなわち第一愛着対象者の代理としての愛着対象者はおくむら先生であることが示されたといえよう。

《保育者の記録ノート：2001年4月10日》

4月になり、環境が変わったからか(友だちも保育士も一部変わり)、朝母親と離れる時、泣いて離れようとしな。又、昨年からの担任が用事で部屋の外に出ると後追いをして泣くようになる。できる時は本児と一緒に連れていったり、連れていけない時でも「○したら、すぐ戻るからね」と声をかけていく。

一方、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼

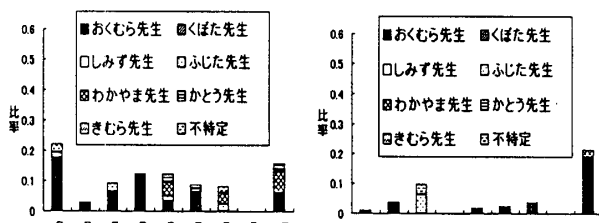


図2-1. しげと 保育者への愛情欲求行動 図2-2. とおる 保育者への愛情欲求行動

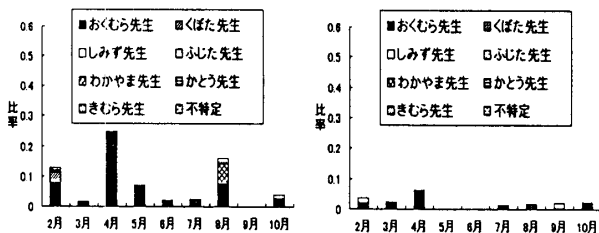


図3-1. しげと 保育者への安全基地行動 図3-2. とおる 保育者への安全基地行動

児に多くみられる、見知らぬ人物および観察者に対する愛着行動(図4-1~図5-2)に関しては、不安定なしげとにはほとんどみられず、安定しているとおるとの差もなかった。すなわち、しげとの愛着行動は、ほとんどが保育者に対するものであった。第一愛着対象者との愛着関係が安定しているとおるに関しては、9月におくむら先生が不在であったために、復帰後の10月に一時的におくむら先生に対する「愛情欲求」行動が多くみられた(図2-2)が、それ以外の時期は、興味のある遊びに従事したり友達と遊んだりする姿が多く観察されていた。こういった行動は第一愛着対象者との愛着関係が安定している乳幼児にみられるものであり(Bowlby, 1969)、実際、不安定なしげとにはみられなかった。観察終了時期(2001年10月)においても、おくむら先生は、しげとの欲求が満たされるようにかかわり方を色々工夫していたが、しげとおくむら先生との愛着関係が安定するにはもう少し時間が必要であった。とはいえ、おくむら先生の記録ノート(以下参照)からは、しげとに少しずつ変化がみられはじめていたことがわかる(波線部)。ここから、しげとおくむら先生との愛着関係は安定しはじめていくことが示唆されたといえよう。

《保育者の記録ノート：2001年10月~11月の様子》

登所時、泣くことはほとんどなくなり、機嫌良く母親と離れる。保育士がすること、していることをとてもよく見ていて、お手伝い大好きの本児である。母親も以前のように“べったり”といったかかわりでなく、一緒に何かをする中でかかわりを持っておられるようである。思い通りにならないと、ひっくり返って泣く

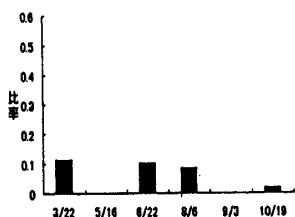


図4-1. しげと見知らぬ人物への愛着行動

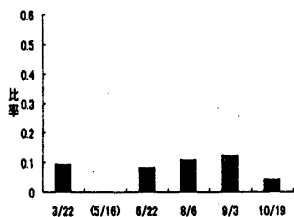


図4-2. とおる見知らぬ人物への愛着行動

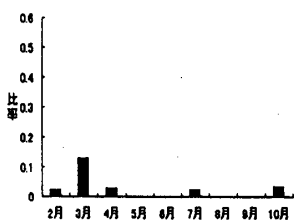


図5-1. しげと観察者への愛情欲求行動

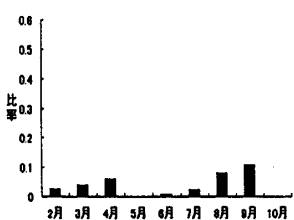


図5-2. とおる観察者への愛情欲求行動

こともあるが、「しげとちゃん、〇〇したいんじゃないね」と、まず本児の気持ちを受けとめると、泣きやみ、気持ちを切り替えていくことができるようになってきた。

本研究では、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児がその後も不安定な対人関係を築くということは必ずしもないという考えに基づき、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児が保育者との間に愛着関係を形成する過程、およびその愛着関係の変容過程について検討した。その結果、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児が、第一愛着対象者の代理としての愛着対象者である保育者との間に愛着関係を形成させ、徐々にその愛着関係が安定していくことが明らかとなった。対象児と保育者との愛着関係が安定することにより、般化が生じて対象児と第一愛着対象者との関係が改善されるという予測に関しては、本研究が限られた観察期間(9ヶ月間)で行われたこともあり、保育者との関係が安定する可能性および第一愛着対象者との関係改善の可能性が示されるのとどまった。また、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児に多くみられる、見知らぬ人物や観察者に対する愛着行動は、しげとにはあまりみられなかった。

今後の課題としては、対象児と保育者との愛着関係の変容過程について、さらに継続して検討すること、また、対象児と保育者との愛着関係が安定することによって、対象児と第一愛着対象者との関係が改善されるかどうかについて検討することが考えられる。

【引用文献】

阿部和子 2001 乳児保育再考III -保護者との連携について- 日本保育学会第54回大会研究論文集, 132-133.

Bower, T. G. R. 1979 *Human Development*. San Francisco: Freeman. 鯨岡 峻 1982 ヒューマン・ディベロップメント ミネルヴァ書房.

Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss, Vol.1 Attachment*. London: Hogarth. 黒田実郎・大羽薬・岡田洋子(訳) 1976 母子関係の理論I: 愛着行動 岩崎学術出版社.

Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss, Vol.3 Loss: Sadness and Depression*. London: Hogarth. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳) 1981 母子関係の理論III: 愛情喪失 岩崎学術出版社.

遠藤利彦 1992 愛着と表象-愛着研究の最近の動向: 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の外観-心理学評論, 35, 201-233.

乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程
— 第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に —

- 金子龍太郎 1993 乳児院・養護施設の養育環境改善に伴う発達指標の推移—ホスピタリズム解消をめざした実践研究—発達心理学研究, 4, 145-153.
- 金子龍太郎 1996 実践発達心理学—乳幼児施設をフィールドとして—金子書房.
- 鯨岡 峻 1986 母子関係と間主観性の問題 心理学評論, 29, 506-529.
- 鯨岡 峻 1988 初期母子関係の発達と愛着の問題 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 22, 27-43.
- Leiderman, P. H. 1989 Relationship disturbances and development through the life cycle. In A. J. Sameroff, & R. N. Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood*. pp.165-190 New York: Basic.
- Main, M 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment: Findings and directions for future research. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. pp.127-159 New York: Routledge.
- Sroufe, L. A., Egeland, B., & Kreutzer, T. 1990 The fate of early experience following developmental change: Longitudinal approaches to individual adaptation in childhood. *Child Development*, 61, 1363-1373.
- 立元 真・千坂克馬 1998 乳児院における発達遅滞児への個別トレーニングの経過 名古屋自由学院短期大学紀要, 30, 123-135.
- 吉葉研司 2001 乳児保育における間主観的な「保育者—子ども」関係の重要性について 大阪千代田短期大学紀要, 30, 215-224.
- (主任指導教官 山崎 晃)